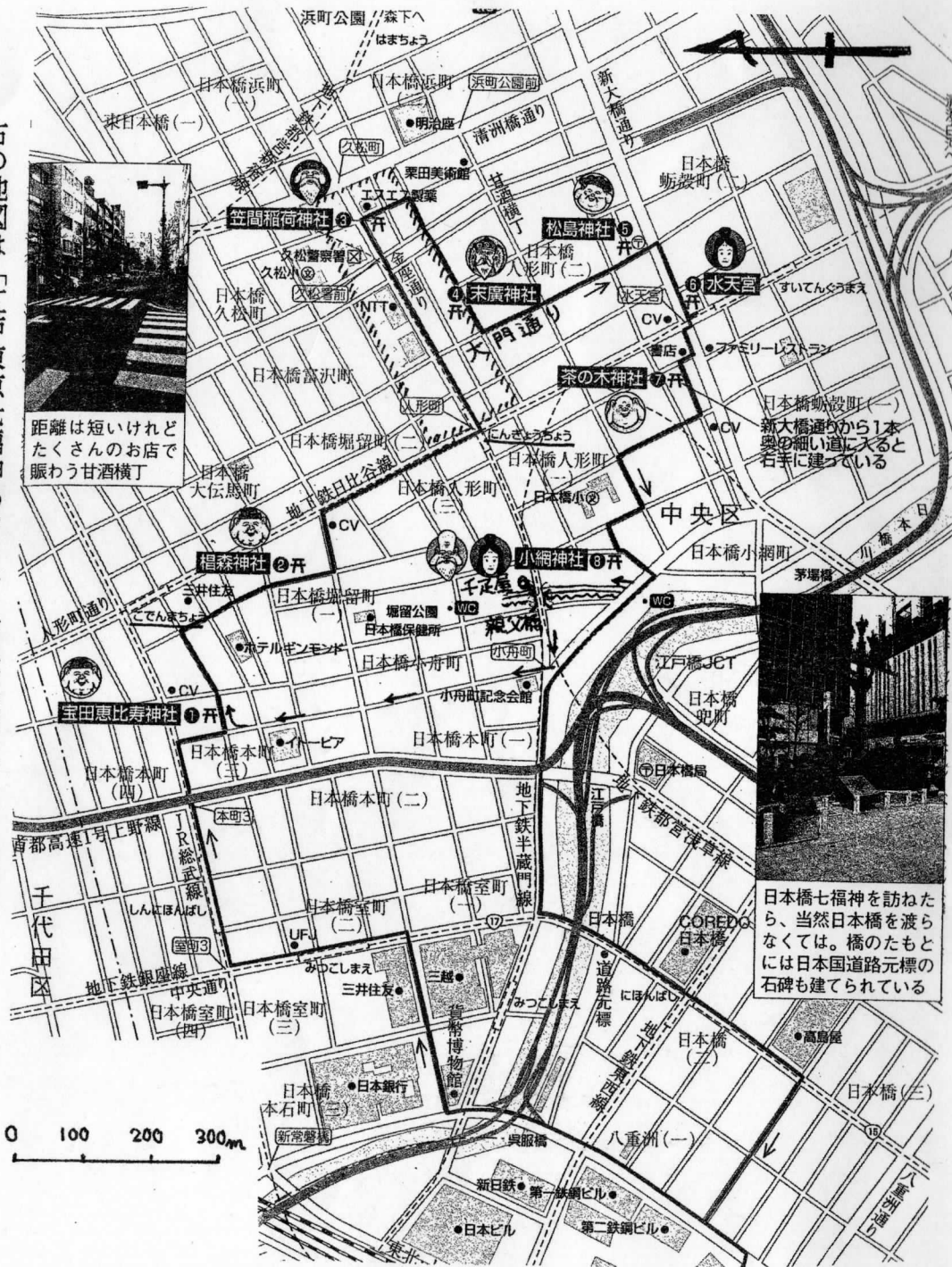


平成19年1月3日(土)

第363回 史跡めぐり

「日本橋七福神を詣でる」

右の地図は「江戸東京七福神めぐり」(日本出版社)より抜粋



距離は短いけれど
たくさんのお店で
賑わう甘酒横丁

日本橋七福神を訪ねたら、当然日本橋を渡らなくては。橋のたもとには日本国道路元標の石碑も建てられている

NPO法人・越谷市郷土研究会

第363回 日本橋七福神を詣でる

日時 平成18年1月3日(土) 午前9時

集合場所 越谷駅東口

コース(現地徒歩距離 約3.1キロ)

越谷駅→日比谷線の人形町駅

玄治店(げんげい)跡・末広亭跡

・笠間稲荷(寿老神)

・末廣神社(毘沙門天)

大門通り(おもしろ)

「元・吉原」跡地

甘酒横丁

・松島神社(大黒天[大国主神])

・水天宮(弁財天)

・茶の木神社(布袋尊)

・小網神社(福祿寿・弁財天)

千疋屋と親父橋

・宝田恵比寿神社(恵比寿神)

・相森(まのり)神社(恵比寿神)

十思公園

石町(いそちやう)時の鐘

伝馬町牢屋敷



現地解散 12時予定

上から毘沙門天、布袋尊、福祿寿(右)、寿老人(左)、
弁財天、大黒天、恵比寿天

そばに日比谷線の小伝馬町駅あり

玄治店 (げんやだな)

茅場兜電話局の裏手からこのあたり一帯は、江戸時代初期に、三代将軍家光のお抱え医者岡本玄治(二代目)の屋敷のあった所で、家光の難病を癒すほどの名医であった。

後に町地となり、貸家が多く建ち並び、お妾さんなどが多く住んでいた。かつては岡本玄治の屋敷があった所で、その後も岡本玄治の領地なので、俗に「玄治店」と呼ばれた。

歌舞伎のお富・与三郎の舞台となり、切られ与三郎のお富へのゆすりの場面が演じられることで有名。芝居では「玄治店」と言わずに、「源氏店」と言い換えられている。

末広亭 (すえひろてい)

ここに末広亭があった。慶応3年(1867)に発足した寄席であったが、昭和45年(1970)に廃業した。現在では、跡地に大きなビルが建っていて、その前に末広亭の記念碑がある。

笠間稲荷

《寿老神》

幕末、常陸国笠間藩八万石の藩主(大名)である牧野氏が、笠間の城下町にある笠間稲荷の本社をこの地に分祠した。

末廣神社

《毘沙門天》

江戸時代初期、この地にあった遊郭、吉原(当時は葎原[あしむら]と称した)を地主神[いぬのかみ](産土神[うぶなみ])として守る神社。吉原の遊郭は、明暦3年(1657)の明暦の大火で焼失した。その後、新吉原(現在の台東区千束)に遊郭が移る。

延宝三年(1675)に社殿を修復した際に、縁起のよい末広扇が見つかったことにちなんで、末広神社と名付けられたという。

大門通り (おおもんどおり)

吉原(元吉原)の大門に通じる道なので「大門通り」と名付けられた。

甘酒横丁

明治の初め頃より、「甘酒屋横丁」と呼ばれた。この横丁の入口に、尾張屋という甘酒屋があったことにちなんで名付けられた。

松島神社

《大黒天[大国主神]》

昔は、松の生い茂る小島であったので、松島神社(稲荷社)と呼ばれた。神社の燈明が江戸湾を航海している近く船にとっての目印になったという。

明暦の大火以前は、このあたりは遊郭を控えた歓楽街で、そのころから酉の市が立って、人形細工職人、歌舞伎役者、葎町の芸妓傾城、呉服商人

などで賑わった。今でも、別名、「大黒神社」と称して、11月の酉の日、酉の市が立っている。

なお、この神社の祭神の一人に大国主神[おほくにぬのかみ]が祀られているが、大国主神は、音が似ていることから、大黒天と同一視される。

水天宮

《弁財天》

安産の神様として有名な水天宮は、もとは、港区赤羽にある有馬の殿様(久留米藩主)の藩邸にあった。久留米にある水天宮の分祠である。毎月五日の縁日に殿様の特別のはからいで藩邸が解放され、庶民の参拝が許された。そのため、「なさけありまの水天宮」という洒落言葉が流行した。

また、ここには弁財天を祀る祠がある。有馬公が加賀百万石の前田公と能の芸を競うことになり、屋敷の弁財天に願をかけると、勝つことができたというので宝生(ほうしょう)弁財天と呼ばれた。宝生とは能の一派である。

ここで、かつて錨の小絵馬が売られていた。花柳界の女性たちがよい旦那の足止めにと願[ねが]いかけに使った。

茶の木神社

《布袋尊》

昔は、神社の周囲に茶の木が見られていたので、茶の木神社(稲荷社)と呼ばれた。そして、この佐倉城主堀田家の屋敷内は勿論、このあたりでは火災が起こらなかったために、火伏せの神として信仰されるようになり、年に1回の初午の日のみ屋敷の門が開かれて一般の参拝が許され、「お茶の木様」の愛称で親しまれた。

小網神社

《福祿寿・弁財天》

参詣人にどぶろくをふるまう「どぶろく祭」は、奇祭として有名である。この日に神楽殿で神楽(民俗文化財に指定)が見られる。11月後半に行われる。本来は、その年に取れたお米に感謝する新嘗祭(11月23日)に行うものである。この日から正月にかけて「みみずく」のお守り(すすきを素材として、みみずくを形作ったもの)が売られる。

また6月30日の「夏越[なつこし]の大祓[おほはらい]」には、茅[か]の輪くぐりが行われる。

この神社(稲荷社)には、日本橋地区に残る唯一の木造檜造りの拝殿と神楽殿がある。中央区の文化財に指定されている。

ここの弁天様は、萬福舟乗弁財天とか、東京銭洗い弁天として知られる。

千疋屋と親父橋

別頁参照(「親父」とは、吉原開設の労を尽くし、この橋を架けた庄司甚右衛門をさす。)

フルーツパーラー千足屋のルーツ

せんびきや

増岡武司

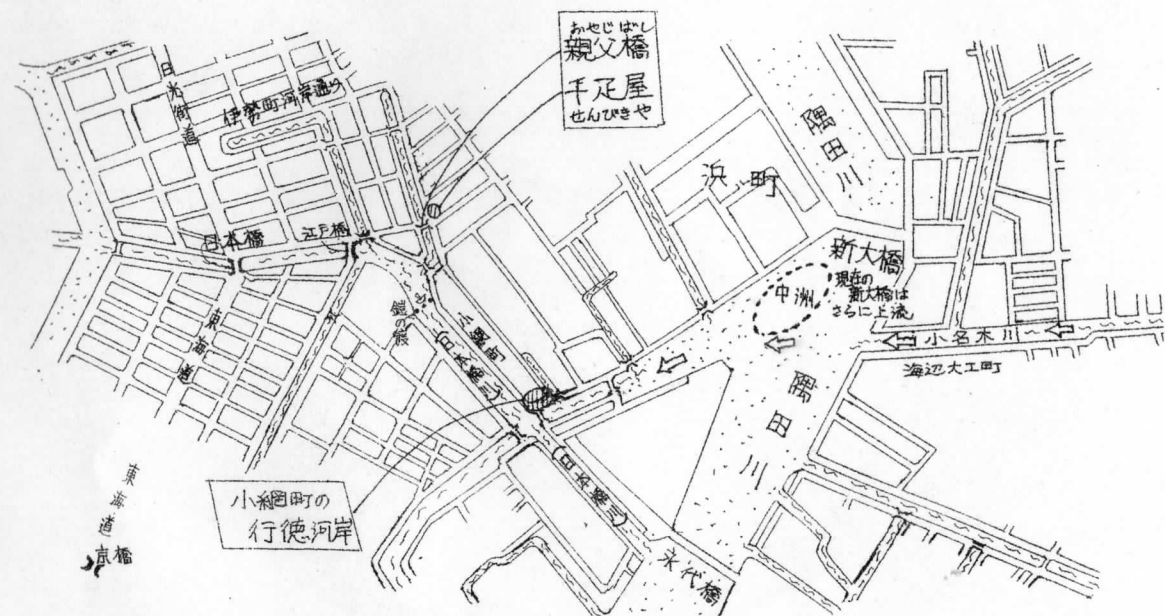
千足屋の起こりは、天保五年（一八三四）である。武蔵国埼玉郡千足村（現在の越谷市東町）の侍だった弁蔵（千足屋の初代）が江戸の葺屋町（現在の日本橋人形町三丁目）に「水菓子安うり処」の看板を掲げ、千足屋弁蔵と名乗って果物や野菜類を商ったのが始まりである。

弁蔵は出身地の千足の郷付近で採れる美味しい桃やその他の果物・野菜等を大量に江戸に運び、今で言う産地物を直売し、新鮮なものを安く売った。そして、この店は大繁盛し、江戸の人々に大変喜ばれたそうである。

二代目文蔵はなかなかの商才のある人物である。徳川將軍家の御用商人となり、一方で大衆とのつながりを深めるとともに内外の珍しい果物を世の中に紹介し好評を博した。これが現在の千足屋につながった。日頃あまり目にしない果物が並んでいるのはこの二代目以来の千足屋の特徴ともなっているようである。

そして三代目大島代次郎になると経営が近代化され、わが国初の果物専門店が創業されるに至った。やがてフルーツパーラーはブームとなり、一般名詞化されるようになり、五代目代次郎は各地に支店を展開した。そのあとの六代目大島博氏の時代となると、ワインや紅茶など幅広い食材を扱うとともに、飲料部門を別会社として食にまつわる様々な経営を展開するようになった。

（千足屋のルーツの紹介にあたっては高崎力氏の協力を得ました）



寶田恵比寿神社 《恵比寿神》

もとは、宝田村の鎮守で、江戸城前にあったが、千代田村、祝田村とともに村ごと移転した。宝田村は、ここに移されたのである。10月20日の恵比寿講が開かれる前日の19日に「べったら市」が開かれ、恵比寿講の当日の20日にも「べったら市」が行われる。

「べったら」のいわれは、若者により浅漬け大根（べったら）を混雑を利用し、参詣の婦人たちに「べったらだ～、べったらだ～」と呼びながら着物の袖につけ婦人たちをからかったことからといわれています。

梶森神社（すぎのもりじんじゃ） 《恵比寿神》

このあたりは、昔から繊維問屋が多く集まっていた、織物の神様として別名「文布(じり)」神社とも呼ばれた。文布とは古代の織物の一つである。

江戸時代には、多くの人々が集まる土地柄だったので、この神社の境内で富籤(とみくじ) [富突(とみき)ともいう] の興業が行われた。それを記念した富塚がある。梶森神社の富籤は、古典落語の題材ともなっている。

この神社でも宝田恵比寿神社と同様に恵比寿講が10月20日に開かれ、その前日の19日と当日の20日に「べったら市」が開かれる。

梶森神社は、梶森稻荷とも呼ばれ、烏森稻荷、柳森稻荷と共に「江戸三森」の1つとなっている。

十思公園（じっしこうえん）

このあたり一帯（隣の旧十思小学校や大安楽寺境内）は伝馬町牢屋敷のあった所である。処刑場があった所には、現在、地藏尊が建てられている。明治8年（1875）に市ヶ谷に市ヶ谷監獄ができるまで使われていた。

ここには、石町から移されてきた「時の鐘」の他に「吉田松陰先生留魂碑」がある。終戦後、マッカーサーにより、この種の記念碑の撤去命令が出された時、この留魂碑は、碑面をうまく塗り潰して難を免れた。

石町時の鐘（こくちょうときのかね）

江戸に最初に設置された時の鐘。本石町3丁目（現在の日本橋室町4丁目付近）に置かれ、江戸市民に親しまれてきた。現在の鐘は、宝永8年（1711）の鑄造である。江戸市中には、「時の鐘」が9カ所（石町、浅草、本所、上野、芝、市ヶ谷、目白、赤坂、四ツ谷）に置かれたが、この「時の鐘」は、歴史が一番古く、唯一の幕府公営の鐘である。

すぐ近くの伝馬町牢屋敷では、この鐘の音の合図で処刑が執行されていたが、わざと時間を遅らせてつき、処刑者の命を少しでも延ばしていたと言われることから、別名「情けの鐘」とも呼ばれた。